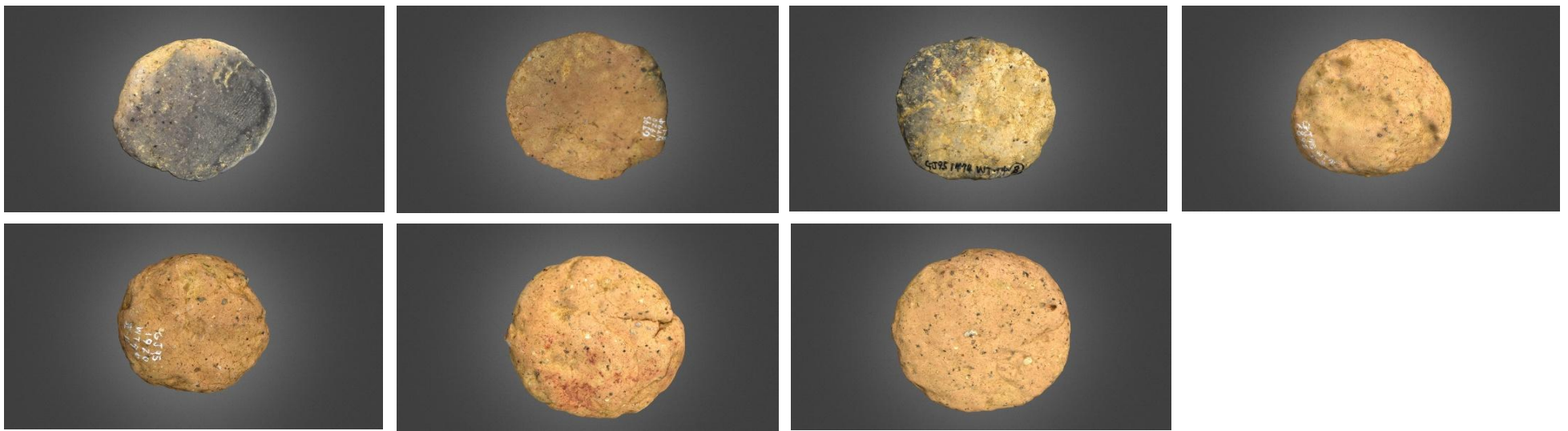


食物形土製品（餅形土製品）



①概要

公開している画像の中に、「食物形土製品（しょくもつがたどせいひん）」がたくさんあります。文字通り食べ物の形をしたミニチュアの土製品で、行者塚古墳の「西造り出し」という祭祀の場から集中して出土しました。同じ場所からは筭形土器（ざるがたどき）や小型の壺や高杯（たかつき）などの土器も出土しており、豊富な食べ物を器に盛り付け、古墳の中心人物へ捧げる儀式の様子が土器で表現されています。また、食物形土製品の周辺からは家形埴輪の破片がおよそ10棟分集中して発見されています。

食物形土製品のうち、円盤状に整えられた一群を「餅形土製品」としています。合計8点出土しており、画像ではそのうち7点を公開しています。大きさは直径3cm前後で、1cm以下の薄手のものと、1cmを超える厚手のものがあります。

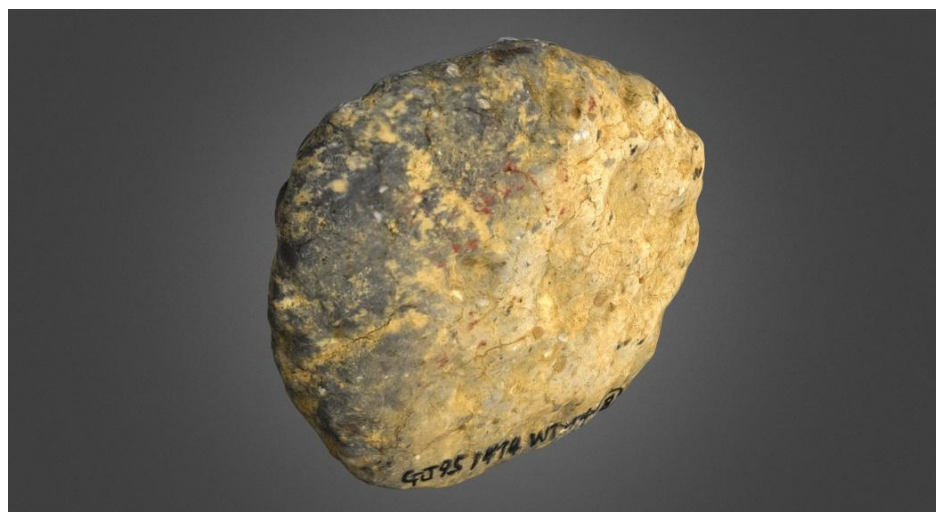
②ココに注目！！



薄手の餅形土製品の中に、製作者の指紋が残されているものがあります。土製品の多くは、粘土の塊を指で押さえて形を整えるシンプルな作り方のため、表面には指紋や凹凸がそのまま残ることがあります。行者塚古墳は5世紀はじめ頃に築造されたと考えられるため、今から1,600年前頃に加古川に暮らしていた人の指紋を見ていることになります。



厚手の餅形土製品の中には、粘土の仕上げが甘くつなぎ目が残っているものや、粘土に混ざっている石がむき出しになっているものがあります。この遺物には、それらに加え、赤色顔料（せきしょくがんりょう）と呼ばれる塗料が付着しています。この遺物を赤く着色していたというよりは、祭祀に使われた家形埴輪などに塗られたものが付着したと考えられます。



土製品の中には、黒斑（こくはん）と呼ばれる黒いシミが見られるものがあります。これは、粘土を焼くときに付着した炭素が定着したもので、埴輪などにも見られます。

土製品は粘土をこねて作る簡単なものですが、成形後は乾燥させて焼き上げるという他の焼き物と共通の工程で作られ、完成後は古墳に運ばれて、造り出しで行われる祭祀の重要な道具として活躍することとなります。